

職場環境と挨拶

大島 秀文

●挨拶は大事だ

晴れ渡る朝は突き刺す寒さの冬でも、ジリジリと照りつける真夏でも気持ちのいいものだ。ところがいくら晴れたいい天気でも、挨拶の無いキャンパス（職場）は気分的には良くないものである。皆さんのキャンパス内では気持ちの良い挨拶が自然に行われているだろうか？挨拶があまりない日は仕事の調子が上がらないことを経験することがある。キャンパス内で通りすがりに学生とすれ違うとき挨拶をしないとその場の雰囲気が悪いなど、当たり前だけれど、この挨拶をするという人間関係がいかほど大切であろうかと思うことがたびたびある。

私が大学という職場に就いて今年でちょうど十五年目になった。その間、総務課で人事や会計、旅費計算などの庶務業務を三年、教務課で現代中国学部新学部設置の準備に一年、国際交流課で学生の中国を中心とする留学派遣業務を中心に四年、教務課へ再び戻り現代中国学部の書記と教職課程および諸課程と証明書作成の担当で五年を経て、また再び昨年四月に総務課へ舞い戻ってきた。

●社会情勢の変化

振り返るともう十四年も過ぎたと思うと長い。諸先輩に比して決して長くはない。この十五年の間に社会情勢は大きな変化を遂げ、それに伴い職場の環境も大きく変化をしたといつて良いと思う。仕事を始めた一九九三年は国際政治が激変している頃だった。ベルリンの壁が崩壊し、天安門事件の後、東西冷戦の西側仮想敵国として不動の位置にいたソビエトは急激に弱体化・解体し、CISと

なり、共産党独裁政権は崩壊した。他方ではユーゴスラビアの内戦やイラクのクエート侵攻など冷戦後の国のパワーバランスが変わり価値観が多様化を遂げ、新世紀へ向かい混沌とした状況になったことは明白であった。科学技術や情報化社会の発展も特に九〇年代前半以降急激である。敵のリーダーに映りにくいステルス戦闘機の登場やパトリオットミサイルがピンポイントで敵を破壊する映像が報道されることも従来の戦争ではありえない事象であり、その映像に目を疑った。第一このような情報を一般市民がほぼ全世界同時に捉えることができるようになってきたのも、情報技術の発達とグローバル化の影響である。地域の問題は世界に瞬く間に放送され、瞬く間に自分たちにも影響が出てくるようになってきた。

●事務ツールとして画期的だったEメール

グローバル化と同時に進行してきた情報革命によるコンピュータ社会も、PCからさまざまな世界を見られるようになったことでそれまでの価値観は大きく変化し、社会構造も急激な変化を遂げて来ている。私たちの仕事にも変化が現れた。

一九九三年当時私はワープロを使って文書作成をし、経理処理の時もアイコンをクリックするのではなく、コマンド文を選択して打ち込んで演算処理をしていた。プリンタもドットプリンタを使ったもので非常に不便を感じていた。

ところが直ぐにワープロパソコンというものが出てきたのだが、そのカラー画面の見易さとアイコンによるコマンド操作は素人の私でさえもある程度の文書作成と表計算を簡易にできるようにさせた。当時特に注目したのは、Eメールの利用が簡単にできたことである。もちろんワープロ機の時代でもパソコン通信があったのだが、私はウィンドウズの3・

0を利用してからしか知らないのだが、海外にいる友人や文書の添付送信も簡単であり、瞬く間に遠くの友人と通信ができたことに驚きとうれしさがあった。

当時は教養部の解体などの動きがあったり、セメスター制導入の検討段階であり、まだ講義も通年制が通常の時代であった。

それまでは手書きが多くを占めていた文書もこの便利なツールの前では誰もがPCを利用し、データの交換をすることで、文書はデータとしてハードメモリやFD等に蓄えられていき、パソコンは不可欠な事務用品になっていった。それまでは課室に数台であったデスクトップパソコンに取って代わり、二〇〇〇年ごろには各人一台ずつノートパソコンが配布されるに至った。

手書きからデータ化し今は教務、法人業務をシステムとして稼働しはじめた現在では、十分なセキュリティ体制を確立し徹底した管理をしないと仕事ができな

い状況になってきている。情報セキュリティは現在全学で取り組んでいる重要な課題のひとつである。

● 団塊世代の退職と構成員の変化

この十数年間は人的状況も大きな変化をしている。団塊世代の退職は本学では選択定年という制度により非常に多くの職員の交代を招いた（現在は選択定年を利用して退職される方の数は制度の一部変更もあり減っている）。事務職員も教育職員もこの五年間で沢山の入れ替えがあり、年齢の若返りが起きた。同時に専任職員で穴埋めをしない事態も定着してきた。専任事務職員の抜けた後任には人材派遣社員を入れるなどして人数確保するなど行われてもいる。ほぼ全ての課室に人材派遣社員がおり、図書館等では図書整理作業に業務委託という形式もとっている。退職者が多かった数年は、退職金支出が大きかったものの人件費の抑制におおきな効果があったのはいうまでも

ない。

人数が変わっていかなくとも、人の構成が変わったので、職場の雰囲気も当然変わった。たとえば、職人気質の職員は時に学生に厳しい態度をとったり、学生の意見を聞かなかつたりという状況もあったのだが、人材派遣の方が窓口で接すると、非常に丁寧に対応をし、学生との対応の問題も解消されている状況があるようだ。逆に専任職員の方が適切な場合もある。マニュアル以外の対応を迫られた場合に適切な対応ができないこともあるようだ。

団塊の世代の諸先輩が一気に退職したことで、蓄積してきたノウハウを直に伝えられないため、仕事の一部が継承されない部分もあるのではないかと危惧する。一方で不要な業務は大いに削除すべきではある。多くの諸先輩の退職により仕事のやり方をPC主体へと比較的手段に移行できた要因となっていることも事実であろう。

● コミュニケーションを強めて 大学を活性化していく

データの電子化への移行により、瞬時に正確で複雑なデータの取り出しが可能になったことは非常に仕事のスピードを高めた。でも逆のマイナスの現象も増加した。それは目をはじめとする体に生じるさまざまな健康障害である。毎日日本に目が疲れる。時折気分も悪くなることもある。それだけではない。職場の雰囲気もずいぶん変わったのではと思うことがある。仕事は進んでいくが、事務室はシーンとしている。この雰囲気は十年前と比べてどこか異なる。事務職員がほとんど仕事をPCで進めて行っており、文書交換もファックスよりきれいで速いEメール送信に頼っている。仕事中は非常に静かな状態が長い。あれやこれやと相談して試行錯誤して仕事を行っていくような形態ではなくなってきたように思われる。

この状況が続くと、事務職員や教育職員同士のコミュニケーション不足を助長する恐れが高い。コミュニケーション不足はそれだけにとどまらず、学生との距離感も大きくなるのである。PCだけに頼らず、むしろコミュニケーション不足を埋めるためにPCを積極的に活用し、風通しのよい気持ちいい職場の雰囲気を構築できればと願っている。結局のところ、大学は教員、職員、学生、派遣社員、生協職員、守衛さん、清掃員、食堂の営業者などさまざまな人々で構成されており、そのいずれもが互いに大学の構成員であることを強く意識して明るく元氣な職場の雰囲気を作り上げていくことにより、大学で何かを創り上げるパワーとなり、大学が発展していく原動力となると私は信じている。自然に出てくる挨拶がそれを変えていくきっかけと思い、今朝も元気に挨拶を交わした。

おおしま・ひでふみ

愛知大学・名古屋総務課